

1) 三成地区の現状 - 人口・拠点施設

- ・人口：2,114人（2019年住民基本台帳）
- ・高齢化率：37.18%（同左）
- ・商店：ショッピングセンター サンクス
- ・子育て：三成幼児園、三成小、仁多中
- ・公共施設など：町役場仁多庁舎、三成中央公民館、仁多郵便局、町立奥出雲病院、山陰合同銀行三成支店（連担地と呼ばれる役場周辺集落に集中）



- 担い手組織・・・三成郷づくりの会

☆ 自治会長等60人余で2018年7月発足。住民で知恵を出し合い住民が互いに連携した活動に取り組むことで、元気で生き生きと安心して暮らせる住み続けたい郷づくりの構築を目的に活動している。

☆ 三成郷づくりの会が地区の課題解決のために昨年度実施した8回のワークショップ及び住民アンケートを通じて、次の4つのプロジェクトが立ち上がった。

- ①交通・買い物
- ②空き家対策
- ③イベント
- ④世代間交流

2) 三成地区の支援開始時点の課題

- ❑ プロジェクトを推進するためのスケジュール管理、情報共有、意思決定、広報などの手法が身に付いていない。
- ❑ プロジェクト間の連携、リーダーと五役との報連相が意識されていない。
- ❑ 年度が替わっても会の活動が継続される仕組みが確立されていない（年度ごとに会員の約半数が交替）。

3) 支援内容

1. 三成地区の住民プロジェクトの推進：ワークシートを継続活用（左図①参照）
2. リーダー・サブリーダーの育成：リーダー・サブリーダー会の運営支援
3. 会の組織力強化：地域づくり計画の参考資料作成（左図②参照）
4. 地区民への情報共有、メディア活用：広報誌、プレスリリースの支援
5. その他、「小さな拠点づくり」に効果のある支援：町、県、中山間地域研究センターに随時相談、情報共有。

①

イベント	
私たちの取り組んでみたいことは！	
農地を使ったイベント	
メンバー	
・熊 廣一（リーダー） ・森櫻 俊治（サブリーダー） ・松本 茂、松原 典生、 藤原 明則、安部 広美 植田 正治	

なぜ取り組むのか？（背景）	誰のために？（ターゲット） 何のために？（目的）
三成（地域）の未来を元気にする	子どもたちに定住してほしい。遊休農地の活用をしたい。定住していなくても三成の文化祭には戻ってくるような思い出を子供につけてほしい。
何をやるのか？	プロジェクト外の誰と、どうやって連携する？
サツマイモの作付け、収穫、収穫祭。文化祭での焼き芋販売。+@で何かがやりたい。次年度のメンバーで考えてもよい。	世代間交流プロジェクト トークフォークダンスでの子供たちの声を活動へ反映したい。

「住みよい郷づくり」を目指して 4つのプロジェクト・年間スケジュール												
3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	備考
交通・買い物プロジェクト												
空き家対策プロジェクト												
イベントプロジェクト												
世代間交流プロジェクト												

②

三成郷づくりの会 第5回全体ワークショップまとめ (2020年2月5日開催)				
地域の目指す姿：住民が相互に連携した活動に取り組むことで元気で生き生きと安心して暮らせる住み続けたい郷				
プロジェクト	イベント	世代間交流	交通買い物	空き家対策
取り組みの柱	農地を使ったイベント	子どもと高齢者が繋がるネットワークづくり	交通弱者の「足」の確保	空き家の現状把握～空き家見える化～
取り組みの背景	三成（地域）の未来を元気にする。	元気な若年層の外出のきっかけ作り。20年先の未来を子どもたちに伝えていく取組・交流が必要である。	（地区アンケートで「助け合いの輪」。「助け合いサービス」の要望が多かった。）※苦難のためエブリプランにて実施	農田周辺の空き家の現状（管理されているか、放置されているか）を把握することで地域を守る。
取り組みの目的	遊休農地の活用をしたい。定住していなくても三成の文化祭には戻ってくるような思い出を子供につけてほしい。	子どもには三成を育んでもらい、高齢者には思い出を伝えてほしい。世代を超えた相互の交流を創出したい。	交通弱者・買い物弱者のために買い物や通院の支援を行う。また地域で暮らすために必要なサービスを提供する。	三成地区をより住みよい地区にするため、三成地区の住民の安心・安否のために活動を行う。
これまでの取り組み	■三成幼児園、三成小学校と合同の芋ほり ■三成地区文化祭での焼き芋販売	■三成地区文化祭での仁多東に寄り付き移動お餅つき大会	■交通空白地域での寄り合い集お餅つき大会	■空き家調査 フィールドワーク
今後の変化（目指す姿）	文化祭でサツマイモが定番になることで文化祭の楽しさが伝わる。	三成地区だけに限らず、町・多摩川沿いで世代間交流に取り組めるようになる。	でし親の仕組みを完成してたき芋の交流の場を創出する。予約制で、予約に合わせた活動を行う。	自治会ごとに空き家の活用調査を実施する。
今後の変化（目指す姿）	選挙などで三成を離れた子供たちが三成へ帰郷・定住してくる。	自治会単位で世代間交流に取り組めるようになる。	でし親の仕組みを完成してたき芋の交流の場を創出する。予約制で、予約に合わせた活動を行う。	自治会ごとに空き家の活用調査を実施する。

4つのプロジェクト2020年度スケジュール												
3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	備考
交通・買い物プロジェクト												
空き家対策プロジェクト												
イベントプロジェクト												
世代間交流プロジェクト												

4) 支援成果

1. 4つのプロジェクトの自立：
 - ①ワークシートの活用
 - ②個別ミーティングの開催
 - ③リーダー・サブリーダーのリーダーシップ
 - ④プロジェクトのビジョン共有
 - ⑤情報共有・情報発信
2. プロジェクトの連携：
 - ①リーダー・サブリーダー会、全体ワークショップを適切な時期に開催
 - ②①の場でリーダーらが適切に情報共有できるよう支援

①－⑤により以下の手法が備わった

- ・スケジュール管理
- ・情報共有
- ・意思決定
- ・広報

①－⑤の継続により、支援開始時の課題「年度が替わっても会の活動が継続される仕組み」が構築され、プロジェクトの活動が安心して新会員に引き継がれる。

プロジェクトが横の連携を意識できるようになった。イベントプロジェクト・世代間交流プロジェクトの合同企画、交通・買い物プロジェクトが他プロジェクトのイベントに稼働を検討、など。

5) 残る課題

1. リーダー・サブリーダーのさらなる育成：ワークショップスキルの獲得の支援について達成することができなかった。3) のワークシートを次年度以降も活用すること、リーダー・サブリーダーらが進行を担うことが必要である。
2. 地域づくり計画の策定：3) ②の資料は地域づくり計画に必要な要素を全て含んでいる。この資料は会員が理解、共有したものであるため、次年度のプロジェクトの活動が軌道に乗ったタイミングで、五役から地域づくり計画について会員に説明し、会員みなで地域づくり計画を進める必要がある。

- 6) 総括
 - ◆ 各プロジェクトの自立、連携、継続が確立されてきた。5年後、10年後を目指すため、地域づくり計画の策定を。
 - ◆ プロジェクトの活動範囲を三成に限定せず、町内地区外のやる気のある人たちと連携することも大切。
 - ◆ 町外の小さな拠点では若い世代の男女が活動していることから、町外との交流も三成に良い刺激になるはず。